1. 私の教育歴は対応理論と教師期待、ラベリングという三つの概念によって説明できます。  
   　まず、私の高度な教育達成の礎となったのは小中学校の頃の教育でした。私が小学校から中学校まで通った学校はSESの高い、高所得のブルジョワ層のための学校でした。このような学校の特徴、学校文化はカリキュラムや授業内容に反映されていました。当校で行われた授業は生徒の主体的な思考と問題解決能力を養うことを本目的としており、伝統的な知識伝授の教育方法とは大きく異なりました。生徒は問題を与えられ、それに対する解決策を提示するように促され、その解決策の正当性を主張する方法を学ばされました。このように自由の中での創造的な思考を重視する授業で生徒は自由の使い方を教わり、かつ自己発信と自己実現の機会を与えられることにより自分の意見を重要だと考え、それを積極的に発信していく主体的な姿勢が培われました。学校がこのような授業を行なっていたのは偶然ではありません。資本主義社会において教育の中での社会関係と生産活動は対応しているとする対応理論の立場から考えれば、私の学校が自由と主体性を重視したカリキュラムを行ったのは、将来ビジネス界でエリートとして活躍することを期待されている裕福な生徒にビジネスにおいて役立つ技能を伝授するためでした。人格形成に重要な時期をこのような教育を受けて過ごしたことが私に与えた影響は大きく、私は問題解決と積極的な意見の発信、主体的に活動に取り組む能力を得ました。  
   　教師期待は私が日本の高校へ進学してから大きく私の勉学に対する意識や進学意識に作用しました。私は高校へ入学をした時点から教師に大きく期待を寄せられていました。その高い教師期待の源泉となるものには入学試験で測られた私の学力以外に私の性、人種的・民族的アイデンティティ、家庭の経済的背景、父親の経済的成功からの後光効果など、ミクロな要因が多く働いていたと推察されます。特に私は英語と日本語の両方を、しかもフォーマルな言語コードを操って喋れたということは、教師の期待を大きくあげる効果がありました。また、小中学校で培われた積極性と主体性が先生に大きく評価され、そのような積極性と主体性を持って、しかもフォーマルな言語コードと家庭から教わったフォーマルな社交性を利用して発言と主張をしていました。それが私と他の生徒の間の差異となり、先生からの期待に繋がったのでしょう。この期待は優遇という形で現れ、教師からのトリートメントで明らかに私と他の生徒の間に差が存在していました。このような高い期待が私に与えた影響は大きく、その期待があったからこそ自分の自己評価も高まり、自分への期待の基準も高まったのです。このような自分への期待と自己評価が勉強と成功への意欲となって今の教育達成に結びついたのです。  
   　また、上に述べたような教育期待は先生から私に付与されたラベルという形で顕現し、その後の私の行動や志向の方向を規定するに至りました。高校での教師は私を「できる生徒」と認定し、高く評価し、その高い評価は自分のうちに内在化されて自信へつながりました。教師の期待が正の効果を生み出すピグマリオン効果の典型であり、当初は自信がなかった私が自信をつけることになった背景には教師から高く期待されたことがあります。教師からの期待が親へも影響を与え、周囲からの期待が高まるにつれて自分でも自分の優秀さを信じるようになり、それが学業的な向上と教育達成という形で実りました。
2. 教育に関する多くの研究は、繰り返し個人の教育達成における学校の比重の軽さと、SESなどの家族・個人要因の比重の重さを明らかにしてきました。その中でも最も影響の大きい要素の一つが経済的豊かさであります。経済的豊かさは文化資本などにも直接関わり、また教育機会という点においても子供の教育に大きく関わってきます。さらに、教師の期待やラベリング、トラッキングなどにもSESは直接働いており、SESをある程度平準化することが学校における見えない不平等の解消にもつながります。そのため、私は学校の制度をどうこうする以前に、学校に行く生徒の各家庭の経済状態をある程度平等化することが平等な教育を達成するための最も効率的なメソッドであるように思います。そのために私が推薦する政策は、「高学歴税」なるものの導入です。「『高学歴税』は、何を高学歴というか明確な基準を設けた上で、一定所得以上の高学歴保有者を、学歴による経済的アドバンテージを受けているとみなして課税するシステムです。」（アンダーランド、2019、第一回授業レポート）。このような税金を導入し、それによる財源を子持ち世帯の経済格差解消に当てることが私の考える教育不平等の是正のための政策です。「こうすれば学歴による経済格差や高学歴の世襲のような問題を和らげ、全生徒に機会の均等が確約される状態に近づけることができると思います。このような現実的な制度を通じて、教育機関が教育にとどまらず経済的にも積極的に援助を行って格差是正に向けて取り組むのが義務教育の理想の状態だと思います。」（アンダーランド、2019、第一回授業レポート）。
3. 今の日本の学童の、低い学ぶ意欲を改善するためには、第一に教師からの期待が必要であります。教師の期待とそれによるラベリング、トラッキングは生徒の自己評価と自己期待に大きく影響を及ぼし、ピグマリオン効果といって教師からの期待が高いほど生徒の教育達成も高くなるということも観察されています。そのため、低い学習意欲を解消するためには、すべての生徒が教師などのsignificant otherから期待を感じる必要があると思われます。生徒の低い学習意欲を解消し、すべての生徒の学習意欲を高めるためには、すべての生徒に期待を感じ、学習を促すような教育を導入することが必要です。私が提案するのは、中学校や高等学校の高位の教育段階で学歴競争と実力主義的な勉強と数字による一元的な学力の評価の世界に入る前に、小学校の段階では数字による生徒の評価をしないことです。そうすることで、生徒が早々から自分の力量を悟ってしまい、それに応じて自分への期待の度合いを決めること、また教師も生徒への期待の程度を決めてしまうことを防ぐことになります。また、そのような一元的な評価から離れ、すべての生徒に先生が高い期待を寄せることで、生徒の自信と意欲を、実績主義と評価の社会に導入する前に養うことで、そのような競争にも対応でき、常に向上心を持つようにすることができます。